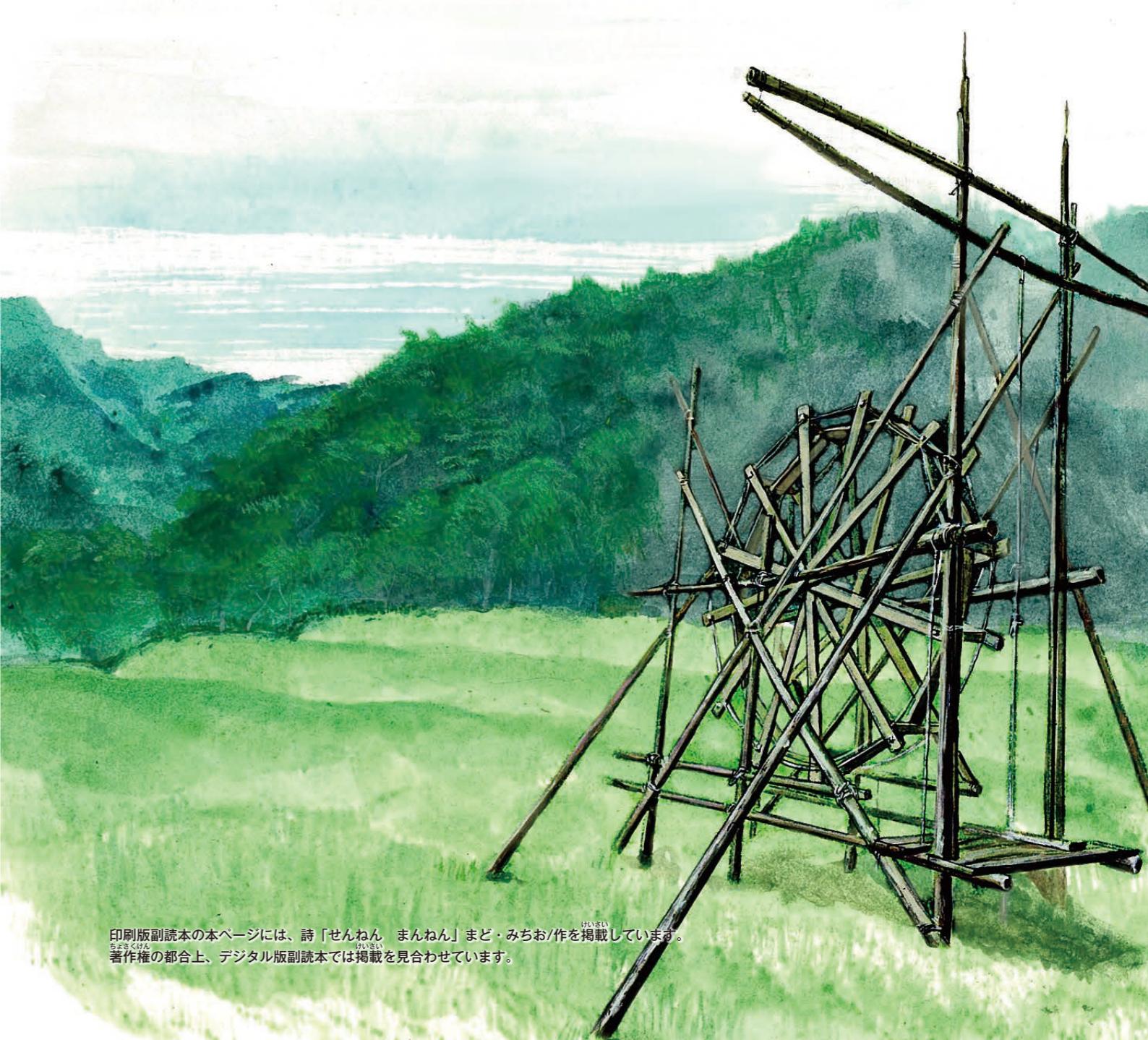


※デジタル版では左の図からリンク先にジャンプすることができます。

- 第 1 章 歷史 P.07
 - 第 2 章 山 P.25
 - 第 3 章 川 P.49
 - 第 4 章 まち・里 P.61
 - 第 5 章 海 P.77



君津市景観計画（平成30年12月発行）より



印刷版副読本の本ページには、詩「せんねん まんねん」など・みちお/作を掲載しています。
著作権の都合上、デジタル版副読本では掲載を見合わせています。

君津の大地の成り立ち

たいこ ちそう 太古の君津の地層で大発見

たい こ むかし ぱう そうはんとう
太古の昔、君津をはじめ、房総半島（千葉県）の大地の多
くは海底にありました。その証拠に、平成15（2003）年、
いちじくそう はくつ
君津市内の市宿層からなんとクジラの化石がまとまって発掘
され、大きなニュースになりました。この地層からは、クジ
ラの骨だけでなく、サメの歯やトウキョウホタテなど海の生
き物の化石がたくさん出てきました。

現在、クジラの化石の実物は千葉県立中央博物館に展示されています。

A ザトウクジラ類

複数のろっ骨がまとまって発見され、千葉県立中央博物館が発掘調査を行ったところ、頭骨や下あごの骨、頸椎、胸椎など、一頭のザトウクジラ類の骨であることがわかりました。

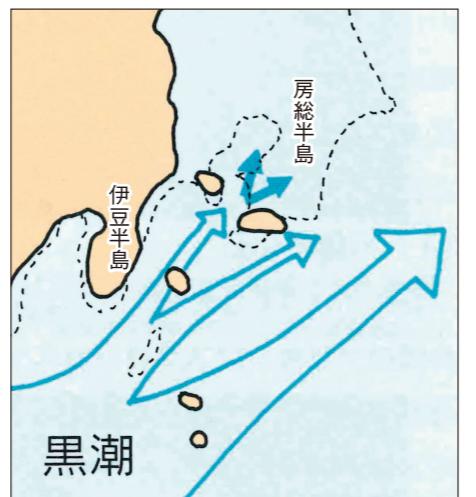


なんでクジラの化石が君津の山にあるの？

化石となって発見されたクジラが生きていたのはおよそ70万年前で、市宿層という地層です。房総半島は、かつて深い海の中にあり、長い年月をかけて砂が堆積（積ること）しました。そして、海底にあった地層はその後、隆起（盛り上がる）して山になっています。この山が、川によってけずられたり、砂を取るためにけずられたりして、眠っていた化石が出てきたのです。

いちじゅくそう つ
また、市宿層が積もった時代は
チバニアン期（77万4千年前～12
万9千年前）にあたります。この
時代のはじまりを示す地層が千葉
しめ ちそう
県で最もよく観察されることが世
界的に認められ、「チバ」の名がつ
けられています。

さきゆう れきし
地球の歴史
おく
46億年を
1年にたとえると、
チバニアン期は
12月31日の22時32分から
23時45分までに
なる（さく）



▲→は市宿層を堆積した流れ



君津の山頂からもさらに古い貝やウニの化石が

ハイキングで人気の高宕山山頂（怒田沢）、三石山山頂（草川原）、寂光不動（山名）には、およそ200万年前にできた黒滝層というかたい地層があり、ここから貝やウニの化石が見つかっています。つまり、海底にたまたま地層が、200～300mほど隆起したと考えられます。また、それぞれの場所で、変わった形の奇岩が見られるのは、とてもかたる黒滝層がけずられず、残っているためです。高さこそちがいますが、標高8000mを超えるヒマラヤ山脈の高所から海の生き物の化石が発見されるのも、同じく隆起によってできた山だからです。



たか ご かんのん せい わ
高宕觀音 (清和地区)



みついしやまかんのんじ かめやま
三石山觀音寺 (亀山地区)

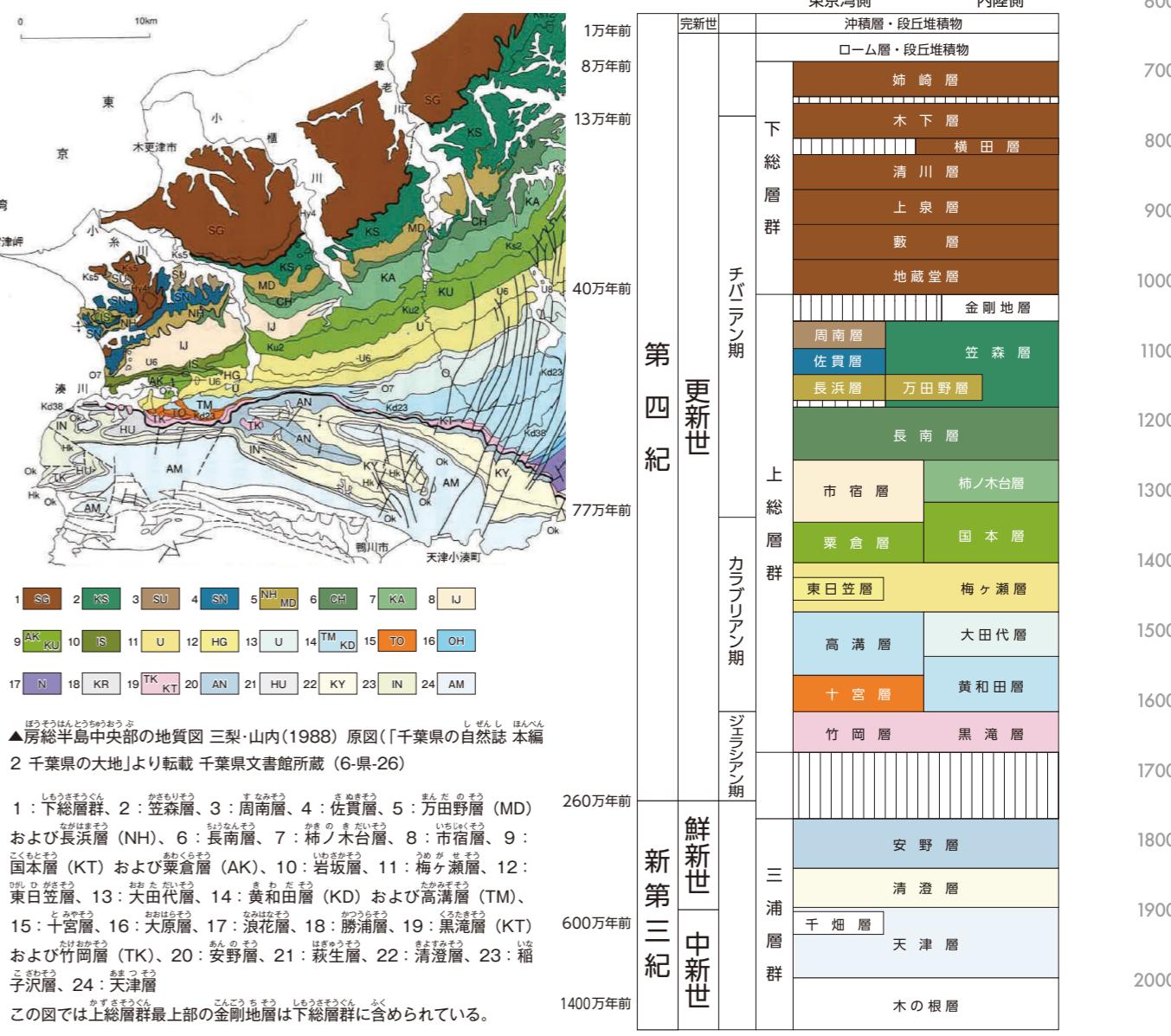


▲ 寂光不動 (清和地区)

注意！
かつて ちそう
勝手に地層をけずつ
て岩石・化石をとるこ
とは絶対にダメ！ と
っていいのは写真だけ。

君津の地層の重なり方

左の地質図と右の地層の重なり表から、自分が住んでいる地域の地層を探してみましょう。



太古の君津にいた生き物たち

君津周辺にいた陸の生き物

動物園やサファリパークにいそうなゾウなどの大型の動物も君津周辺にいました。氷期になると海面が下がり、大陸と日本列島が陸続きになって、大陸から渡ってきた生き物もいました。

●ヤベオオツノジカ



右下あご骨の化石。木更津市畠沢、下総層群地蔵堂層。約40万～1万5千年前に生息。

●ニホンムカシジカ



左右の角と頭骨の化石。市原市引田、下総層群木下層。約35万～1万5千年前に生息。

今、君津市にいる大人のニホンジカは角の枝が4つだけど、絶滅したニホンムカシジカは枝が3つなんだって！

●植物化石

市原市里見、万田野層。主にブナなどの落葉広葉樹の植物化石が産出。※スケールは1cm



①ブナ

②ミズナラ

③ササの仲間

◀ 千葉県立中央博物館発行の『よみがえるチバニアン期の古生物』にたくさんくわしく紹介されています。

●ムカシマンモスゾウ



久留里城址
資料館所蔵

下あご骨・臼歯の化石。君津市植畠の小糸川河床の梅ヶ瀬層（140万年前の地層）から明治28（1895）年に発見された。



ムカシ
マンモスゾウの
化石は久留里城址
資料館で実物を
見られるよ！

君津周辺にいた海の生き物

P8で紹介したクジラの他にも

こんな生き物たちが見つかっています。これらの発見で、当時の様子がわかつてきました。

●ホホジロザメ

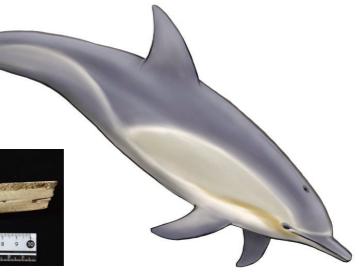
歯の化石。君津市市宿、上総層群市宿層。

全長6mにもなる大型のサメ。中央の歯の高さ4.2cm。



●マイルカ科

下あごの骨の化石の一部。君津市市宿、上総層群市宿層。



B.C.
3000

B.C.
1000

原始

A.D.
1

100

200

400

500

600

700

900

1000

1100

1200

1300

1400

1500

1600

1700

1800

1900

2000

現代

現代



▲ミナミハンドウイルカ
(撮影・提供: 宮川尚子)

●マンダノセイウチ
雄の頭蓋骨の化石。上総層群長浜層。

右は現生セイウチ（タイヘイヨウセイウチ）の頭骨写真。



この見開き
ページの背景にある
影はトウキョウ
ホタテ実物大だよ。



●トウキョウホタテ



木更津市畠沢、下総層群上泉層。化石は大量に出てるが、絶滅種。20cmを超える化石も見つかってます。水深が浅かったことがわかります。

●イボチョウガニ



※スケールは1cm
君津市山原、下総層群地蔵堂層。

●キタクシノハクモヒトデ



君津市市宿、上総層群市宿層。

※表記のないものは全て千葉県立中央博物館所蔵・撮影。
※復元画は全て徳川広和氏制作。

●他にはどんな動物がいたのだろう。
●なぜ絶滅してしまったのだろう。
●化石ってどうやってできるの。

探究のタネ



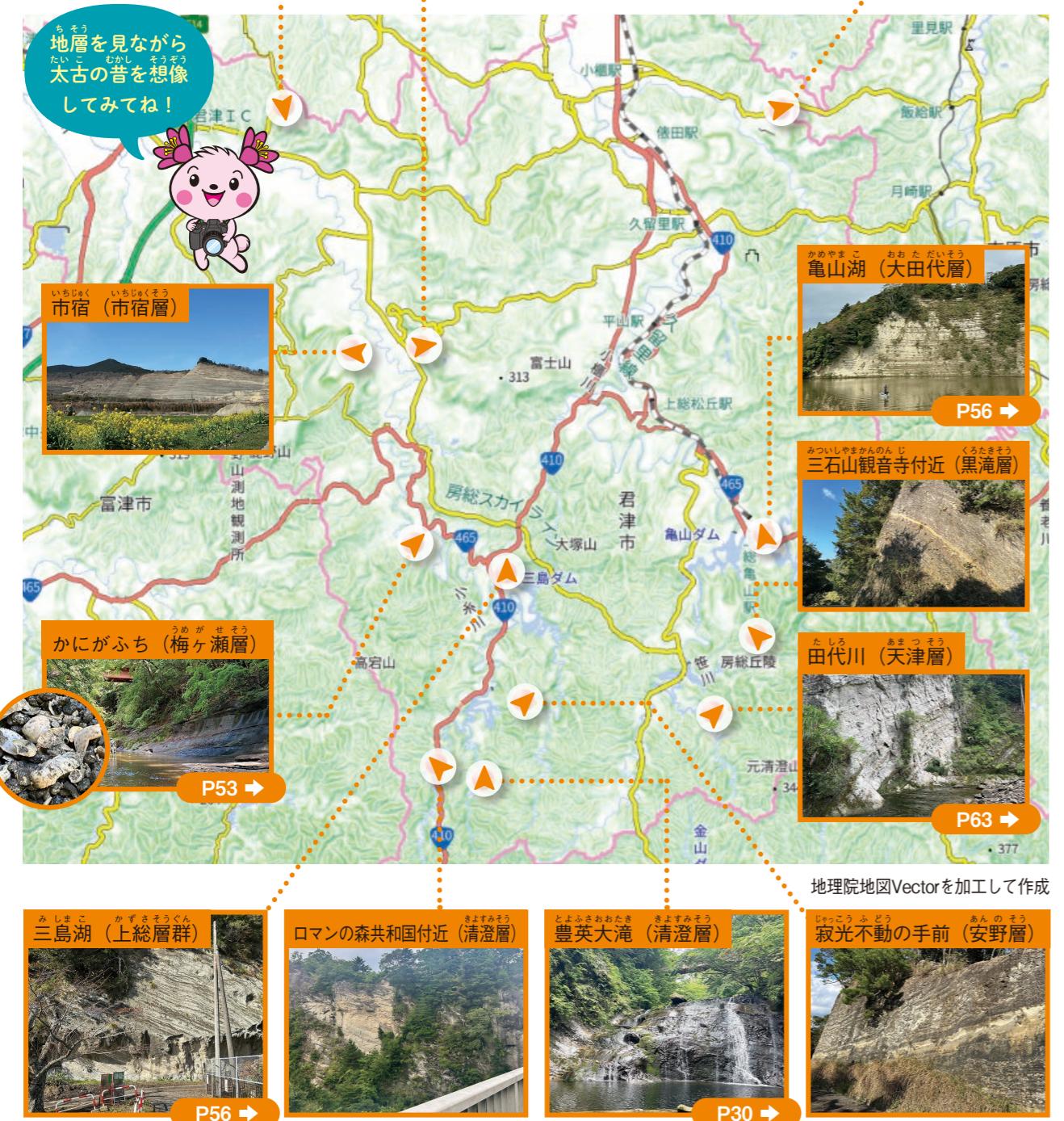
君津で見られる地層

君津市で見られる主な地層マップ

注意!
私有地へ許可なく入ることはできません。



きみつ
ムービーバンク
見てみよう



地理院地図Vectorを加工して作成

P30 ➡

上総層群

清澄層

安野層

泥層

砂層

泥層

君津市、千葉県の縄文時代ってどんな様子?

1万年以上続いた縄文時代は、縄文土器という厚手で、低温で焼かれた縄目がついた土器を使いました。縄文時代の人々は、海や川に近い台地などに竪穴住居を作り、狩りや魚捕り、木の実の採集をして生活していました。ダイズやアズキなどの植物栽培も始まったとされています。石、貝、動物の骨・角で釣り針やアクセサリーも作っていました。また、海の近くには、「貝塚」といわれる食べた貝がらや動物などの骨がまとまって見つかる場所があり、当時の暮らしをよく知ることができます。

日本一貝塚が多い千葉県

海に囲まれた千葉県は、日本一貝塚が多い都道府県で、全国の約3割の貝塚があります。なかでも千葉市にある加曽利貝塚は、日本最大級の集落型の貝塚で、国の特別史跡に指定されています。君津地区にも多くの貝塚があり、房総半島最南端の大型貝塚である袖ヶ浦市の山野貝塚が国の史跡に指定されています。君津市では、小糸川や小櫃川周辺の台地上に、100カ所以上の縄文時代の遺跡が見つかっており、その中に大きな貝塚である三直貝塚があります。内陸部ではイノシシやシカなどの狩りの山のむらがあり、海のむらと食材を交換することで、千葉の豊かな食によって持続可能な社会をつくりました。

● 三直貝塚(八重原地区)

今からおよそ4500~3000年前のものと考えられています。高速道路建設時に行われた発掘調査では、集落や環状盛土と呼ばれる当時の土木工事跡と一緒に見つかっています。また、縄文土器や貝で作ったアクセサリー、動物の骨で作った装飾品なども見つかっています(P15参照)。発掘調査の後、埋め戻されており、見学することはできません。

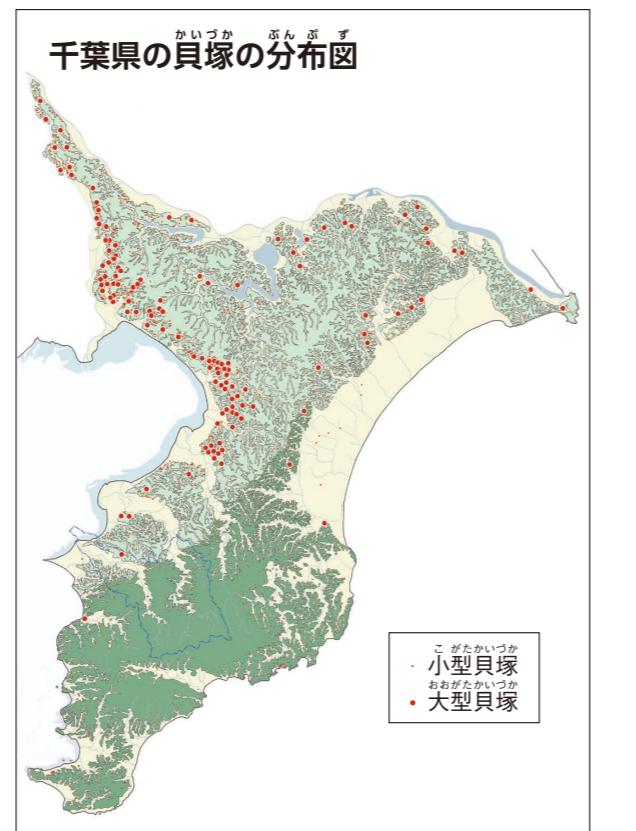


● 寺ノ代遺跡(亀山地区)

漁に使う石錘や土錘という道具が、房総半島の中でも他の遺跡に比べてとても多く見つかっています。この集落では、小櫃川で魚を捕って生活をしていたことが想像できます。



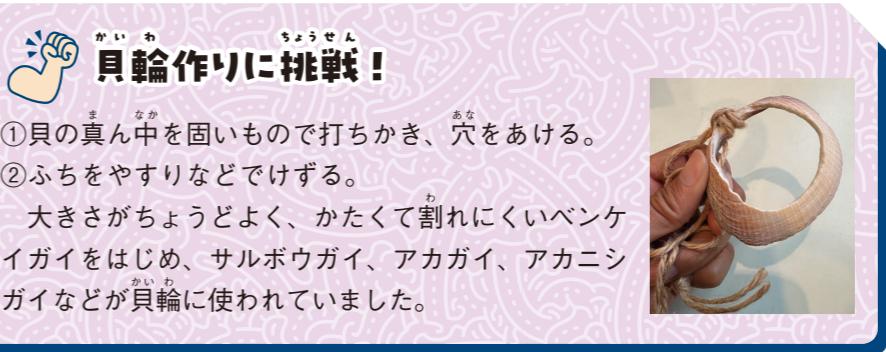
▲寺ノ代遺跡の竪穴住居跡



※A~Dの写真は千葉県教育委員会提供



君津市の三直貝塚で見つかった出土品から縄文時代の暮らしを想像しよう。



もったいない!

イボキサゴの出汁で縄文スープ

貝塚で見つかる貝の種類は何が多いと思いますか? アサリやハマグリなど現代人が好む貝もありますが、実はイボキサゴという小さな巻き貝が8割以上を占めています。縄文人はこれをスープの出汁として、イノシシなど獣の肉やどんぐりなど木の実を煮るのに使っていたのではないか、という説があります。イボキサゴは滅ってしまった時期もあったようですが、ここ数年また増え、東京湾のノリ・アサリ漁師にとって漁の邪魔となってしまっています。小さすぎて食べることが難しく、やむを得ず大量に処分されています。自然の恵みを無駄にしないためにも、縄文人の知恵を借りて、抽出したイボキサゴの出汁を、令和6年2月に君津市内の小中学校の給食メニューに取り入れました。未利用貝だったイボキサゴを活用した学校給食は、日本初、そしておそらく世界初の試みです。タウリンなどの滋養強壮成分が豊富に含まれているそうです。



▲江戸時代にはおはじき遊びに使われていたイボキサゴ

探究のタネ

- 色々な火おこし法を試したい。
- 貝輪、勾玉、鹿角アクセサリーを作りたい。



火はどうやって?

縄文時代には「錐もみ式」で火をおこしていました。後に、「弓ぎり式」や「舞ぎり式」も登場します。



ミニチュア土器

縄文時代~古墳時代の遺跡からは日常生活には使いにくい、手のひらサイズの土器が見つかることがあります。何のためにこれらが作られたのか、まだよく分かっていません。みなさんが想像してみてください。



君津でも稻作が始まった弥生時代

今から約2400年前の弥生時代に、大陸から米作りが伝わったと考えられています。米作りの技術は、西日本から東日本へと広がっていきます。

君津市では、小糸川の近くで常代遺跡や鹿島台遺跡のような大規模な遺跡が見つかっています。弥生時代の人々は、米作りがしやすい水辺の近くなどに住みます。常代遺跡からは、約2100年前の木製農具や水を引くための堰跡が発見され、米作りをしていました。

●常代遺跡（貞元地区、周南地区）

縄文時代から江戸時代にかけて作られた土器や木製品などが数多く見つかりました。

特に、千葉県の弥生時代を代表する遺跡として有名で、「方形周溝墓」というお墓が160基以上も見つかりました。

大きな溝からは、木で作られた農具などが500点以上出土し、非常に貴重なものとして千葉県の有形文化財に指定されています。

炭化米や、2000年前のイネ科の植物花粉も出土しています。



▲おにぎり状の炭化米

●どのように使ったか想像してみましょう



県指定有形文化財（考古資料）



▲常代遺跡発掘調査風景

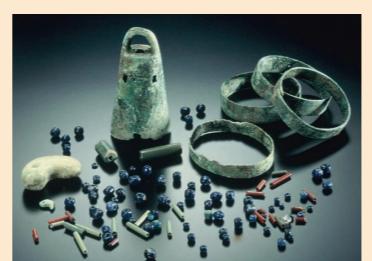
●鹿島台遺跡（周南地区）（旧石器時代～奈良・平安時代）

弥生時代の遺跡部分からは、多くの方形周溝墓や環濠と呼ばれるV字状の溝が見つかりました。環濠は幅約4m、深さ約2mで台地の上をめぐっています。なぜこのように深い溝を作ったのか、ぜひ想像してみてください。



▲鹿島台遺跡・狐山古墳・常代遺跡～

大井戸八木遺跡（小糸地区）の出土品



▲ガラス製の小玉、石製の勾玉や管玉、小銅鐸

市指定文化財（考古資料）

巨大なお墓ができた古墳時代

3世紀になると土を盛って、王や豪族などのお墓である古墳が造られます。この時代を古墳時代といいます。古墳は、造られた時期や埋葬される人の地位などによって大きさや形が異なります。日本で最も大きい大仙古墳（仁徳天皇陵）は墳丘の全長が486mの前方後円墳です。

君津市周辺の古墳と横穴墓

千葉県最大の内裏塚古墳①（富津市二間塚）や、金の鈴が出土した金鈴塚古墳②（木更津市長須賀）が特に有名ですが、君津市にも多くの古墳があります。

4世紀代には、小櫃川流域に、飯籠塚古墳（全長102m）・浅間神社古墳（全長103m）・白山神社古墳③（全長89m）の「小櫃の三大古墳」と呼ばれる全長100m級の前方後円墳が造られます。また、同じ時期に小糸川流域では、千葉県内最大級の前方後方墳である道祖神裏古墳④（八重原地区、全長56m）が造られます。これらの古墳は、地域の豪族の墓と考えられます。

6世紀代には、小糸川・小櫃川流域とともに多くの古墳が造られます。小櫃川流域では、100基を超える古墳が造られた戸崎古墳群があります。小糸川流域では、前方後円墳である八幡神社古墳（外賀輪地区、全長77m）や、小さな山の斜面に横穴を掘って墓とした小山野横穴墓群⑤（周南地区）や市宿横穴墓群（清和地区）が造られます。

①内裏塚古墳

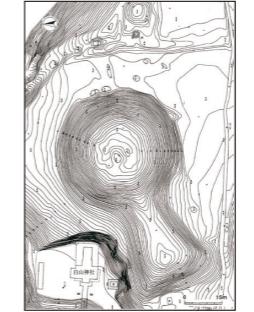
※国指定史跡
千葉県最大の古墳（全長144m）。埋葬されているのは、小糸川流域を治めていた周淮国造と考えられています。

②金鈴塚古墳

※県指定史跡
全長95m。埋葬されているのは、小櫃川流域を治めていた馬来田国造と考えられています。

③白山神社古墳

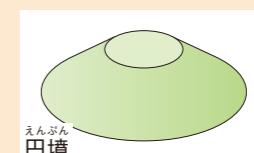
※県指定史跡



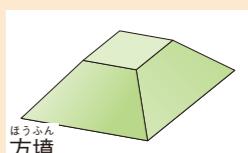
▲出土した金鈴

（木更津市郷土博物館金のすず提供）

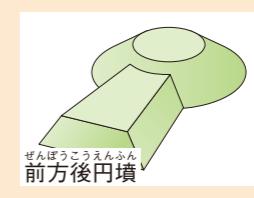
古墳の種類



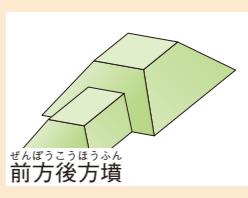
えんぶん
円墳



ほうぶん
方墳



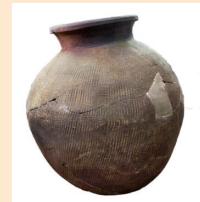
ぜんばうこうえんぶん
前方後円墳



ぜんばうこうほうぶん
前方後方墳

須恵器

古墳時代に朝鮮半島から作り方が伝わった土器です。ろくろで成形し、登り窯を用いて高温で焼き上げます。小糸川流域は、須恵（周淮）の国と呼ばれたことから、何か関係があったかも知れません。周淮は周東、周西、周南という地域名につながっています。



▲君津市周辺の古墳・横穴墓の位置
(地理院地図Vectorを加工して作成)

④道祖神裏古墳

※市指定文化財（史跡）



▲出土した金鈴



※市指定文化財（史跡）



▲出土した金鈴

（木更津市郷土博物館金のすず提供）

B.C.
3000

B.C.
1000

A.D.
1

100

300

500

600

700

800

900

1000

1100

1200

1300

1400

1500

1600

1700

1800

1900

2000

現代

中世

近世

近代

現代

奈良時代～平安時代

7世紀中ごろ以降、日本列島に仏教文化が広がり、古墳を造らなくななります。政治的な地域の整備も進み、君津市域は上総国となり、郡の役所ができ、郡を治める律令制度（法律で国を治める制度）がとられていきました。小糸川流域は周淮郡、小櫃川流域は畔蒜郡となりました。郡の役所の位置は、君津市郡地区に周淮郡が、木更津市下郡地区に畔蒜郡があつたと考えられています。

8世紀以降の平安時代になると、有力者などが土地を自分で所有するようになり、律令制度がくずれていきます。

12世紀代には、さらに開発が進み、律令制の郡域が東西や南北に分かれています。地名に東西南北がつけられることが多くありました。この時代に、周淮郡も「周東郡」「周西郡」の東西2つに分かれたのです。

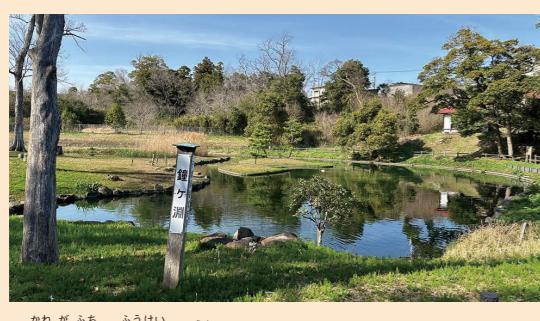
●九十九坊廃寺跡（八重原地区）

7世紀の終わりに造られた周淮郡の郡寺とされ、「九十九坊」の名は、たくさんの建物やお堂が立ちならんでいたという伝説にちなんでつけられています。推定の高さ20mの三重の塔や講堂、門などの建物があったことがわかつています。周辺では、多くの瓦が見つかっています。

また、八重原公民館の下には、九十九坊廃寺と関係がある南子安金井崎遺跡があり、豊穴住居跡や建物跡が見つかりました。奈良時代から平安時代にかけて、八重原地区がとてもぎわっていたことが想像できます。

鐘ヶ淵の伝説（八重原地区）

九十九坊廃寺の梵鐘（=お寺のかね）がこの池に沈んだことに由来するといわれています。「池のコイヤやフナをとると木の葉となり、ウナギを取るとヘビになる」という、生き物を殺すことをいましめる伝説や、銭（お金）を投げ入れ念仏を唱えると、不思議と水が湧きあがったという言い伝えがあります。また池の水は、古くから農業用水に使われたり、昭和時代の初めまでは、酒造用水としても使われていたそうです。



●上湯江遺跡（貞元地区）

住居跡や井戸に加え、絵や文字が墨で書かれた土器（墨書き土器）や書道で使う水差し（水滴）も見つかり、文字を書ける人がいたことがわかりました。



●富吉遺跡（貞元地区）

多くの建物跡は、平安時代の終わりから室町時代にかけて、小糸川を利用して運んでいた物の倉庫として使われていたと考えられています。



▲安房・上総・下総各郡の位置図
(千葉県の歴史)より



▲九十九坊廃寺跡発掘調査
(2024年)

鎌倉時代～戦国時代

房総は、源頼朝が鎌倉幕府を開く前に再起をはかった重要な場所です。戦に敗れて房総に逃ってきた頼朝を、この地の勢力であった上総氏・千葉氏などが支えました。鎌倉幕府が開かれた後、房総は頼朝が奇跡の復活をとげた場所として、多くの頼朝伝説が生まれ、君津にも様々な逸話や通過時の伝承が残されています。

鎌倉時代～室町時代にかけて、君津の地には、鎌倉の寺社領（寺や神社の所有地）が多く設定され、特に小櫃川上流域の龜山地区は鎌倉の円覚寺の寺領となりました。永和元（1375）年には龜山の材木が、火災で焼けてしまった円覚寺の再建のために使われるなど重要な役割を果たしました。多くの武将が勢力争いをしていました。安房から上総に勢力を伸ばしたのが里見氏で、久留里城を本拠地とし、周辺を治めます。君津を含む西上総は、湾岸部から内陸部にかけ、里見氏と小田原北条氏とのせめぎ合いが続いていました。

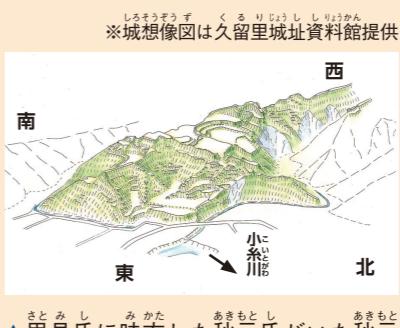
君津に残る頼朝の話 <塞神社と白旗橋（八重原地区）>

塞神社では、道祖神として、道行く人を災いから守る神様をおまつりしていて、源頼朝が戦に向かう際に、戦勝祈願したと伝えられています。源氏の白い旗をかけた通しと伝えられる山の尾根道だった場所は、旧地名を白旗台と言い、昭和時代に県道を通すために切り通しとなりました。そこにかけられた橋は、言い伝えにちなんで、白旗橋と名付けられました。君津市民文化ホールに続く県道を通る時には、ぜひ上を見上げて、頼朝のことを想像してみてください。他に久留里神社（久留里地区）、八雲神社（八重原地区）、人見神社（周西地区）にも頼朝の伝承が残されています。

里見氏 VS 北条氏



▲戦国時代の久留里城想像図



▲里見氏に味方した秋元氏がいた秋元城（小糸城）想像図

里見義堯は、久留里城を巨大な山城として整備しましたが、永禄3（1560）年、城が北条氏に包囲されてしまいます。籠城（城の中にたてこもり敵を防ぐこと）は数か月も続き、落城の危機となります。しかし、里見氏に幸運がもたらされます。里見氏に味方する越後（現在の新潟県）の上杉謙信が関東に出陣してきたのです。北条氏は上杉氏に対応するため、久留里に送った兵を引かざるを得ませんでした。こうして久留里城は落城の危機を脱しました。永禄10（1567）年8月の三船山（三舟山）合戦では、里見氏が北条氏に勝利し、上総の大半を手に入れ、下総の一部にまで勢力を伸ばすことになりました。

小櫃まるごと博物館

里見義堯と義弘
さとみよしたか よしひろ

QRコード



▲塞神社の鳥居



▲白旗橋の下から

上湯江遺跡で銅の古銭を発見！

令和2（2020）年度の発掘調査で、安土桃山時代（戦国時代）の古銭が1100枚以上発見されました。宋（現在の中国）から船で日本に運ばれてきた中国銭です。



▲見つかった古銭

江戸時代

江戸時代の君津には180をこえる村々があり、様々な領主によって支配されました。小櫃川流域には、大名（殿様）の領地（久留里藩領、前橋・川越藩領）の村々がありました。小糸川流域には、幕府が直接治める領地や、旗本の領地の村々がいました。大名は1万石以上の領地を江戸幕府から給料として与えられた藩主で、旗本は1万石未満。大名も旗本も、将軍と直接会える権利を持つ、位の高い人たちです。

また、鹿野山の神野寺のように、徳川の歴代将軍から領地を認められた格式の高いお寺もいくつありました。

江戸時代の久留里城（別名：雨城）

徳川家康によって江戸幕府が開かれたころ、久留里城には、幕府に仕える大名である土屋氏が2万石で入っており、3代78年にわたって久留里の地を治めました。土屋氏は3代藩主土屋頼直のとき、幕府からおとがめを受け領地を没収されてしまいました。その後、久留里城は約60年間、廢城となります。江戸時代の中ごろから黒田氏が久留里藩主となって城を再整備しました。黒田氏の支配は9代約130年間続き、明治維新を迎えるまで。



▲上総小学校の校門にある久留里城のしゃちほこ



君津市ムービー
バンク

徳川將軍の側近：新井白石（1657–1725）

江戸時代の政治家・学者として知られる新井白石（通称：与五郎）は、父の新井正済が久留里藩2代藩主の土屋利直に仕えていた関係で、久留里藩とゆかりがあります。

白石は小さいころから土屋利直にかわいがられ、青年期には何度も久留里の地を訪れています。白石が21歳のとき、土屋家の家騒動がもとで久留里藩を追放されますが、その後、のちに徳川6代将軍となる家宣の学問の師となります。そして、徳川6代将軍家宣、7代将軍家継を支える重要な政治家として活躍するまでになります。白石が行った政治改革は「正徳の治」と呼ばれます。

白石の久留里時代についても書かれている自叙伝『折たく柴の記』は、文学的にも高く評価されています。



▲新井白石の銅像
(久留里城址資料館前)

武士が内職して作った？！ 久留里の楊枝作り

久留里の楊枝作りは武士の内職から始まったという説があります。今から100年ほど前からは、色々な模様の「かざり楊枝」が作られています。



P38「雨城楊枝」

久留里鎌と上総唐箕

江戸時代に君津で発明された農業の道具で、日本の広い範囲で売られたベストセラー商品でした。



P65「久留里鎌と上総唐箕」

新井白石と久留里の町医者、 伴幽庵の交流

伴幽庵は、白石の久留里時代からの友人で、将軍のもとで活動している白石に、自然薯（山芋）を送りました。

白石が伴幽庵にあてて書いたお札の書簡が残されています。

※君津市指定文化財「新井白石書簡」

山・川・海を通じて江戸へ運ばれた物資

右の絵には木更津船と呼ばれる五大力船が停泊している様子が描かれています。君津の山で生産されたものなどを小糸川や小櫃川で運び、この木更津船に積みかえ、東京湾を渡って江戸まで運びました。

また、右の歌川広重の絵の下の方に描かれているものは何でしょうか。P23をヒントに考えてみましょう。

久留里道（参勤交代道）

久留里の城下街からは東京湾や安房、東上総など四方に道がのび、昔から交通の重要な場所でした。

久留里から江戸に行くには3つのルート「東往還」「中往還」「西往還」があり、いずれも「久留里道」と呼ばれていました。中でも「中往還」は「殿様道」と呼ばれ、久留里城主の参勤交代に使われていました。この道は国道410号（現在一部市道）となり、通称「久留里街道」と言われています。

小櫃地区三田の道沿いにある「地蔵尊道標銘」（1805年）や、俵田駅近くの「江戸道道標」（1665年）には、江戸の方向や距離が示されています。



上総小学校では総合の時間に甲冑作りを体験。10月下旬久留里城まつりの武者行列で久留里城下町をねり歩く。（写真は2024年）



▲歌川広重「不二三十六景 上総木更津海上」
(木更津市郷土博物館のすぐ提供)

海と芸術 波の伊ハ→葛飾北斎→西洋の画家

江戸時代、浮世絵師の葛飾北斎は西洋のゴッホ、セザンヌ、ピカソなどの印象派の画家たちに大きな影響を与えたと言われています。その葛飾北斎に影響を与えたと考えられてきた宮彌刻師が千葉県の「波の伊ハ」こと、武志伊ハ郎信由です。

「波を彫らせたら天下一」と称えられた波の表現は抜群で、関西の職人たちに「伊ハのいる関東に行ったら波を彫るな」と言わしめるほどでした。生まれ故郷の鴨川では、馬に乗って海に入り、くずれる横波を近くで観察していたと言われています。

葛飾北斎は文化3（1806）年に房総半島を旅していますが、その時に千葉県各地のお寺にあった伊ハの彫刻を目にしていましたのではないかと考えられています。

君津市内にも、伊ハの作品が多く残されていますが、所有者の調査によって近年発見されたものもあります。その発見によって、今まで分からなかった伊ハの若いころの活動の様子が、よりくわしく分かってきました。

最新の研究では、伊ハと葛飾北斎がそれぞれ別の芸術家から影響を受けたのでは、という説もあります。



▲波の伊ハ「波に宝珠」（行元寺）[いすみ市]（上）
と葛飾北斎「神奈川沖浪裏」（下）



▲波の伊ハ「波に兔」（宝性寺）[君津市 清和地区]

明治・大正・昭和前期

水を低いところから高いところに送る揚水施設がなかったころは、農業はめぐみの雨にたよるしかありませんでした。雨が降らない年は、米が収穫できず、人々は苦しました。

明治28（1895）年、久保・坂田・李師の3地区は、久保揚水車を設置し（現在の富久橋付近）、田んぼに小糸川の水を送ることに成功しました。おかげで、田んぼの面積も大幅に増やすことができました。小糸川下流には、他にも多くの揚水車があり、川の流れる力（水力）を上手に利用していました。

一方、留場という設備が川舟の運行のじゃまになるため、争いもありましたが、話し合ってルールを決めていました。久保揚水車は、昭和38（1963）年に電力揚水機に切りかわるまで、久保普通水利組合が管理していました。

●東京湾海堡（富津市）

明治から大正にかけて、首都の東京を守るために東京湾の富津岬と横須賀市の海がせまくなっている部分に第一、第二、第三の3つの海堡が建設されました。海堡とは、砲台を設置するために造られた人工島です。

このうち、第三海堡は、当時の世界最先端の建設技術で造られていたため、その後の日本の海洋・港湾建設技術の基礎となりました。アメリカ陸軍が参考にするために資料提供を求めていました。第三海堡は、完成から2年後に発生した関東大震災の影響で海にしづみ、船の安全航行の障害となっていましたことから、平成19（2007）年度までに撤去されました。第二海堡へは、上陸ツアーが実施されています。

●関東大震災 大正12（1923）年9月1日

人見地区では土砂くずれが起きて小糸川の水をせき止めたという記録が残されています。

リンク
P29「森林の役割」



君津の戦争の記憶～八重原工場と小山野地下工場～

首都防衛のため、君津は地理的に重要な位置にありました。昭和16（1941）年10月に、国内最大規模の軍用機修理工場である第二海軍航空廠が木更津市岩根に作られました。同年12月、太平洋戦争が開戦すると、工場拡大のために分工場が必要となります。岩根に近いこと、鉄道に近いこと、広い土地があることから、周西駅（現・君津駅）周辺の八重原村・周西村に分工場用地が決められました。現君津中学校の場所は、海軍航空廠事務所の跡地です。その後、戦況が悪化したことにより、小山野（周南地区）にはトンネルがはりめぐらされ、多くの女学生が勤務された地下工場もできました。工場建設に携わる人々で人口が急増し、複雑になった役場の事務を効率化することが求められました。そこで、昭和18（1943）年4月1日に八重原村・周西村が合併し、（第一次）君津町ができました。

※『戦時体験からみた君津』（八重原公民館）参考

君津の海の大きな決断その1～ノリ養殖を始める～（江戸・明治・大正・昭和～）

右の写真A・B・Cは、かつての君津のノリ養殖に関する道具です。どのように使うか想像してみましょう。

リンク
P31「三島山マテバシイ」
P80「ノリ養殖」



●何度も断られてもあきらめない近江屋甚兵衛（1766-1844）

上のAは木や竹をたばねて海にさしてノリを成長させる「ノリひび」、Bはノリを手で収穫するときに使う「ノリげた」、Cはノリを細かくする「飛行機包丁」です。

江戸時代、君津でノリの養殖が始まるまで東京湾では、多摩川河口付近の品川や大森で養殖が行われていました。江戸でノリ問屋を営んでいた近江屋甚兵衛は、ノリ養殖にふさわしい場所を見つけて、いつか自分でノリを作ってみたいという夢を持つようになりました。

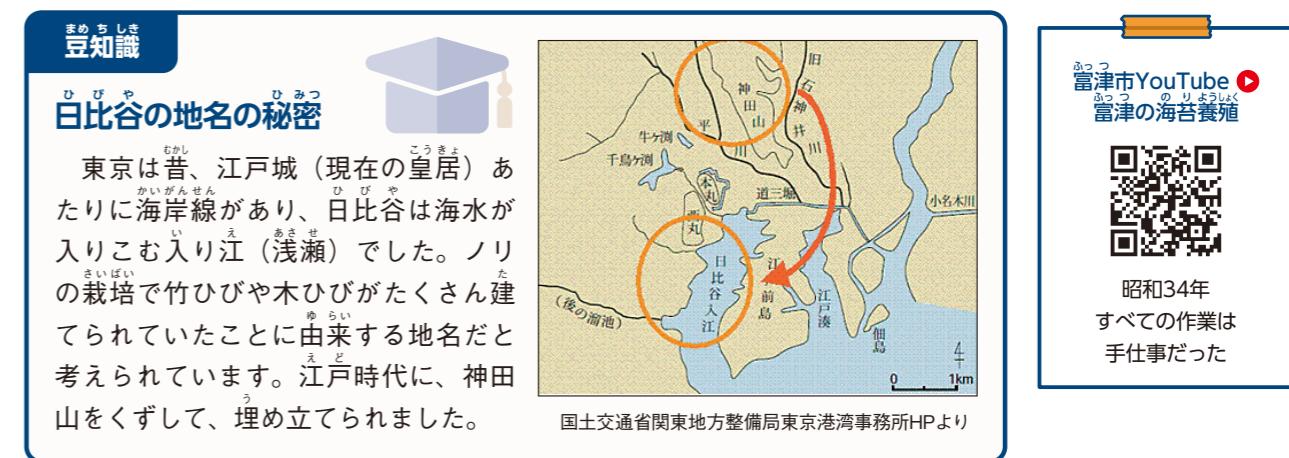
そのため、甚兵衛は①江戸川河口（現：市川市）、②養老川河口（現：市原市）、③小櫃川河口（現：木更津市）の村々で、村人たちにノリ養殖と一緒にしないかと説きました。しかし、それまで魚や貝の漁をしていた村人たちは「もともととれていた魚がとれなくなってしまうのでは」と不安に思い、断られてしまいました。

がっかりして江戸にもどった甚兵衛ですが、あきらめきれず、今度は④小糸川河口（現：君津市）にある人見村にやってきました。これまでに3か所で断られた甚兵衛でしたが、人見村の名主八郎衛門と村人数人は文政4（1821）年にノリ養殖に協力する決断をしました。最初はうまくいかず失敗しましたが、翌年（文政5（1822）年）の冬、木ひびに黒々としたノリがつきました。千葉県で初めてノリ養殖に成功したのが現在の君津市だったのです。

ここで始まったノリ養殖は次第に周辺の村々へ広がっていきました。君津市周辺で生産されたノリは「上総ノリ」として大変人気となっていました。



▲大正時代のノリはがしとごみとり（人見地区）



君津の工業化(昭和時代後期~)

君津の海の大きな決断その2 ~漁業権譲渡~

君津市の海岸地域はおよそ4kmにわたって遠浅な浜辺が続き、春から秋にかけては貝や魚がたくさんとれ、秋には冬のノリ収穫に向けて一面にノリひびが建てられていました。

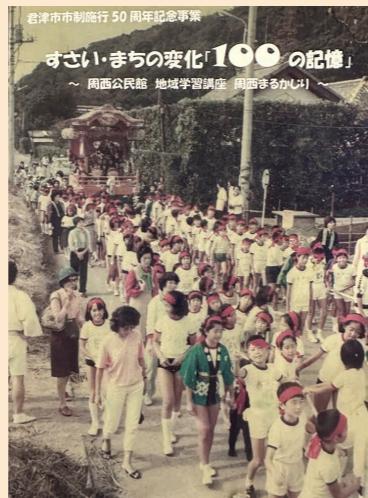
江戸時代の近江屋甚兵衛の決断から始まった千葉県のノリ養殖は、やがて一大産業となり、1940年ころには生産額全国1位になるほどまでに成長しました。

しかし、高度経済成長期の昭和30(1960)年代に鉄の需要が高まったこともあり、君津の海は東京湾を埋め立てて工場を建てる場所に選ばれました。海で仕事をしていた人々は、自分たちの生活が変わってしまうため大変な決断でしたが、未来の君津の発展のために漁業権を譲り渡すことに同意しました。こうして、千葉県の東京湾側に広まったノリ養殖は、発祥の地である君津市からなくなってしまいました。

昭和40年代、奈良輪地先(現:袖ヶ浦市)で、特に成長が優れた養殖品種「ナラワスサビノリ」が発見され、全国に広まりました。江戸時代の東京湾では「アサクサノリ」が主流だったと考えられていますが、現在、日本で養殖されているノリの品種のほとんどは「ナラワスサビノリ」です。となりの木更津市や富津市などでは、令和になった今も全国的に品質の高いノリを生産し続けています。



すさい・まちの変化 『100の記憶』



製鉄所が進出した旧周西村にある周西公民館が当時を知る約100人にインタビューした記録。

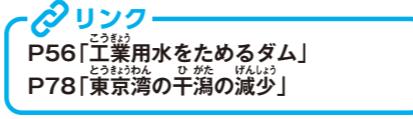


漁業のまちから工業のまちへ

八幡製鐵(その後:新日本製鐵、現:日本製鐵)の進出

漁業権譲渡後、君津の海は埋め立てられ、1965年開業の八幡製鐵君津製鐵所(現:日本製鉄東日本製鐵所君津地区)をはじめとして多くの工場が建ちならびました。また、工場に勤めるために多くの人々が家族と一緒に君津へ移り住み、団地が建てられ、それに伴って新しい小学校(大和田小学校[1968年]、周西中学校[1968年]、坂田小学校[1971年]、南子安小学校[1975年])が次々に開校しました。特に、八幡製鐵所があった北九州市から君津市に2万人以上が移住した状況は、「民族大移動」とも呼ばれるほどでした。当時の学校の教室では九州の言葉がとびかたり、とんこつラーメンなどの食文化も伝わったりしました。

急速に人口が増え、地域開発が進んだ君津町は、昭和45(1970)年に小糸町・清和村・上総町・小櫃村と合併して君津町となり、昭和46(1971)年に君津市が誕生しました。



第2章

豊かな山



印刷版副読本の本ページには、詩「木」田村隆一/作を掲載しています。
著作権の都合上、デジタル版副読本では掲載を見合せています。